

在宅医療連携拠点事業成果報告

拠点事業者名：医療法人徳島往診クリニック附属ハートホーム

1 地域の在宅医療・介護が抱える課題と拠点の取り組み方針について

当地域も高齢化社会となり住み慣れた地域で生活することを支えるためには医療・介護にまたがる様々な支援を提供する必要がある。徳島県の在宅療養支援診療所及び訪問看護ステーションの数は人口比にして国内トップクラスの整備率を誇るが、一方、療養型病床・老人施設も全国トップクラスの整備率であり、せつかくの在宅医療の資源が有効に機能しているとは言いがたい状況である。

徳島県で在宅医療・介護を普及させるには、まずもって医療と介護の連携を進めることが肝要と考える。「顔の見える関係」を構築するために一同に会する場を定期的に設定し、課題の抽出、及びその対応策の検討や学習会を実施する。

2 拠点事業の立ち上げについて

在宅医療・在宅介護のなんでも相談所として、在宅医療・介護に関する各種勉強会、相談業務、ましかどがん患者サロン等の事業を展開していくため、医療法人徳島往診クリニック附属ハートホームを開設した。

<スタッフ>

・介護支援専門員資格を有する看護師 1名

・医療ソーシャルワーカー 3名

(うち、社会福祉士 2名

精神保健福祉士 1名

全員介護支援専門員あり)

5つの必須項目をもとに、在宅診療専門クリニックでの経験を生かし在宅医療を推進してゆくために有効な方法を検討した。

医療・介護従事者の意識を変え、負担を軽減し、ネットワークを築く効果的な手法として、各種研修会や会議の内容を決定し、行政や医師会、拠点病院

等の在宅医療推進に必要な組織への働きかけも重視し続けることとなった。

徳島市内に拠点事業所が3か所出来たことで、それぞれの拠点の特徴を生かした活動により相乗効果を期待したが、残念ながら徳島市医師会には協力を拒否された。しかし、会議・研修会などの日程が重ならないように工夫した。

3 拠点事業での取り組みについて

(1) 地域の医療・福祉資源の把握及び活用

徳島市のもう一つの拠点事業所である、医療法人平成博愛会博愛記念病院と共同で制作。在宅に関わる医療・介護各事業所(在宅療養支援診療所・訪問看護ステーション・薬局・訪問介護事業所・歯科を当事業所が担当)に対しアンケート調査を行い、資源マップ作成。ホームページに掲載予定である。封書・FAXによりアンケート調査を行うも、回答返信が少なく2回実施。返信のない事業所には、電話にて調査の趣旨説明など行いながら返答いただいた。

(2) 会議の開催(地域ケア会議等への医療関係者の参加の仲介を含む。)

①“多職種連携”の課題に対する解決策の抽出を行うため、とくしま在宅医療・介護連携会議を延べ4回開催。第1回目の会議で抽出された課題をもとに各回ごとにテーマを設けた。

・第1回 医療と介護のバリエーションについて語ろう

H24.8.26 参加者:82名

・第2回 医療と介護のバリエーションへの戦略

H24.10.11 参加者:131名

・第3回 認知症患者への多職種協働のための

研修 H24.11.21 参加者:80名

・第4回 見直されつつある今！知っておきたい

経管栄養管理のポイント

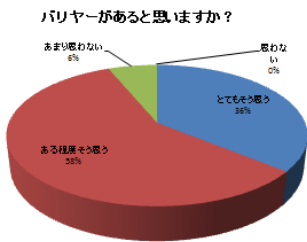
H25.2.28 参加者:120名

◆第1回目のグループワークのKJ法で出された意見をわかりやすく分類(マインドピースというソフトを使用)し、会場で共通認識が持てるよう配慮した。

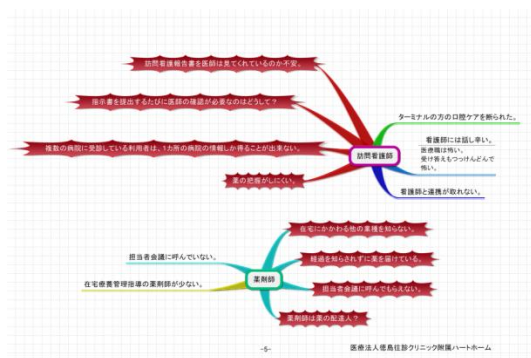
第2回目からは参加者の日程調整などを考慮し、徳島市のもう一つの拠点である、医療法人平成博愛会博愛記念病院と協同で会議の開催を行った。

また、拠点に対する要望の中から、在宅医療を推進するための有効と思われる課題をとりあげ、現在取り組んでない方にも在宅医療のための地域連携を安心してはじめられるような内容を心掛けた。

(3)在宅療養中の患者を取り巻く医療・介護の間に



医療法人徳島経管栄養クリニック 研修ホーム



《アンケートの声》

- ・各職種との連携の課題がよくわかった。
- ・今の徳島の現状がわかった。
- ・行政の参加があり改善点が伝えられよかった。
- ・他の立場(職種)の人の考える対策が聞け、悩んでいるのは自分の職種だけでないのだとわかり安心した。

②連携している事業所との同職種による交流・連携の場を設けた。

- ・訪問看護ステーション連携会議(2回)
- ・ケアマネージャー交流会(2回)
- ・薬剤師交流会(2回)
- ・訪問看護師とケアマネージャーの合同交流会
- ・薬剤師と訪問看護師とケアマネージャーによる多職種合同交流会(研修会)

◆職種別に交流会を開くことで、それぞれの抱える課題を深く掘り下げ、在宅医療を推進するためにひとつずつ解決していこうとした。顔の見える関係ができた。参加者からの要望により多職種合同での交流会も開催し、それぞれの業務について理解しあうことができた。

また、個々の事業所で奮闘している従事者を、在宅医療推進の観点から結び付けていくことができた。

(3) 研修の実施

①言語聴覚士による「誤嚥を防ぐ食べさせ方」実践講座

ヘルパー・訪問看護師・ケアマネージャーを対象に開催。参加者:約100名

②理学療法士による呼吸リハビリテーション実践講座
～在宅でできる呼吸リハビリテーション～

訪問看護ステーション連携会議の中で要望があり、訪問看護師を対象に講座開催。

参加者:40名

③「看取り」講座

ケアマネージャー・ヘルパー対象。

参加者:90名

④～フィジカルアセスメント研修会～

山内豊明先生(名古屋大学大学院教授)による「フィジカルアセスメントの進め方」の講演会

看護師・ケアマネージャー・薬剤師の多職種合同交流会の一環として開催。看護学生、他職種の参加もあり、出席者数150名。

⑤歯科医師による在宅口腔ケア講演

“医療連携のために～歯科とのかかわり～”

参加者:80名

⑥介護支援専門員研修会

～在宅移行困難事例検討会～

この研修会は博愛記念病院及び徳島県介護支援専門員協会との共催とした。

参加者:40名

◆各種会議・研修会の度にアンケートに協力いただき、講座の内容についてや今後希望する研修会のテーマ・参加しやすい時間帯などをお聞きし、参考に計画していった。講師をしていただいた先生方にも、アンケート結果をお伝えできるようにした。

実際に、身近なことですぐに役立つ技術などを伝えることを通して興味をもってもらい、在宅という現場が専門職として、より良い療養生活の実現に貢献できる、やりがいのある職域であることをアピールした。

《アンケートの声》

- ・情報を「伝える」こと・共有することの大切さがわかった。
- ・歯とADL低下の関係や、廃用による口腔の変化がよく理解できたので在宅の患者さんに生かしたい。
- ・最後は、自宅で穏やかに迎えたいと思う者には、励ましとなる講義でした。
- ・説明してくださっていた例にあてはまるご利用者さんがたくさんいたので、今後参考にさせていただきます。

(4) 24時間365日の在宅医療・介護提供体制の構築

①在支診以外の在宅医療に対するマンパワースキルに乏しい医療機関への支援。

平成25年1月現在、在支診の届け出をしていない10以上の診療所に対して、在宅医療支援を行っており、対象患者様は11名である。

②小規模で夜間・休日対応困難な訪問看護ステーションに対して、協働で対処するシステムの構

築。

平成25年1月現在、5件の訪問看護ステーションに対して、訪問看護支援を行っており、対象患者様は5名である。

(5) 地域包括支援センター・ケアマネジャーを対象にした支援の実施

①居宅介護支援事業所のケアマネジャーを対象に、NPO法人徳島県介護支援専門員協会との共催にて、「在宅移行困難事例検討会」を開催。

グループワークでKJ法を用いて、事例検討を行った。参加者:40名

◆介護支援専門員協会への働きかけとして、協会事務所へ訪問したり、電話で相談するも受け入れてもらえず、協会の理事からクレームがあった。これは当該理事が「在宅医療連携拠点事業所が新たにケアマネジャーの会を組織しようとしている」と誤解していたためであった。そこでもう一つの拠点事業所である博愛記念病院の理事長がケアマネ協会の理事長を兼ねていたので、そちらから声掛けを行って、博愛記念病院拠点事業所と徳島県介護支援専門員協会と当事業所共催で行うことが出来た。アンケートには、参加者全員が答えてくださり、100%の回答率であった。今回の症例検討会は良かったと答えた方がほとんどで、次回も参加したいと答えた方が29名であった。

《アンケートの声》

- ・がん患者と関われる機会はあまりないので、他のケアマネと情報の共有が出来た。
- ・全人的苦痛で4つの苦痛に仕分けしてマネジメントできる方法を勉強できました。
- ・マネジメントの仕方が分かりやすかった。

②ケアマネジャーの相談の窓口として、来所・電話にて、いつでも相談にのれるような体制をとっていた。

③地域包括支援センターへの働きかけとして、2回の懇談会を開催した。

◆徳島市では地域包括支援センターは市内に1

か所しかなく、徳島市が徳島市医師会に委託している。徳島市医師会(在宅医療連携拠点である)としては個人情報保護の観点から、当院は在宅医療連携拠点であっても、一診療所に過ぎないため、地域ケア会議に参加することは認められないと拒否されている。

(6) 効率的な情報共有のための取組(地域連携パスの作成の取組、地域の在宅医療・介護関係者の連絡様式・方法の統一など)

①サイボウズの導入・運用

9月～患者の状態などについて、リアルタイムな情報を共有し、重層的チーム医療連携体制の構築を行った。

- ◆ 重症患者中心に15人。ある訪問看護ステーションの方からは、スピーディにリアルな情報が見えて良いと言われている。
- ◆ 病院主治医とリアルタイムに情報共有ができた。
- ◆ 訪問薬剤師にも、処方変更の理由・検査結果等を提供でき大変好評であった。

②メーリングリストの運用

10月～運用開始。アンケート結果をはじめ、在宅医療・介護関係者による情報交換や意見交換、会議などの案内に活用中。連携会議・研修会などで参加登録を呼びかけており、現在、50名以上が登録。

(7) 地域住民への普及・啓発

①在宅ホスピスボランティア研修(2回、4日間)

豊かに生きる講座シリーズ「緩和ケア在宅医療を知る」

- ◆ 研修会を重ねる毎に、マスコミからも取材があり新聞にも掲載され、参加人数が増えるようになった。

②がん患者サロン開催(毎月、第3木曜日)

③在宅医療推進フォーラム

在宅ケアに携わる方・関心のある方々を対象に。

・第2回とくしま在宅医療推進フォーラム

～緩和ケアの始め方～

H24.4/15(日) 参加者:約200人

・第3回四国在宅医療推進フォーラム

～こらからの在宅医療のかたち～

迫りくる多死時代に備えて

H24.12/16(日) 参加者:400名

④“在宅ホスピスケア”市民フォーラム

H25.3/24(日) 参加者:200名

- ◆フォーラムは回を重ねる毎に、新聞掲載・マスコミ取材もあり、市民からの問い合わせや参加人数も増えている。アンケートからも、“とても良かった”と回答を多く頂いている。

《アンケートの声》

- ・終末期を在宅で過ごすことができる思いを強く感じました。 ・自分も在宅で死にたい。
- ・自分の人生について考える良い機会となりました。
- ・将来、1人暮らしになった時でも在宅で医療がうけられる地域社会にしてほしい。

⑤徳島市老人会への参加普及・啓発

- ◆ 定例会に参加し、拠点事業所の存在・在宅療養について等話し、ハートホームのアピールを行った。

⑥講師活動

- ・徳島赤十字病院主催
がん緩和ケア講習会 在宅緩和ケア部門
- ・徳島県主催 がん緩和ケア講習会
～在宅医療連携拠点事業について～
を中心に
- ・徳島県看護協会にて(看護師・ケアマネ対象に)
～在宅医療連携拠点事業について～
- ・在宅医療連携セミナー講演会にて
「在宅医療と病院連携～お家にいても大丈夫」
- ・(株)大塚製薬工場社内研修にて
「在宅医療連携事業について」

- ・社会福祉法人徳島県自殺予防協会にて
「“自宅で死ぬ”ということ」

⑦在宅医療・介護相談会 H24.11/24(土)
大型ショッピングセンターにて、買い物客対象に相談会開催。

- ◆ショッピングセンターと話し合いを重ね、スーパー入口での案内チラシを配布し相談会を開催。当日、店内で看護師(CM)・MSW・歯科衛生士・居宅CMで相談体制をとり血圧測定(5人)など声かけを行った。医療相談の為に、ハートホームにて医師も待機した。苦労したにもかかわらず、相談の数は少なかった。理由として、歳末という時期が悪かったのか？買い物に来られる方は元気な人ばかりだからなのか？

⑧日常的に、“ハートホーム”事業所内に在宅医療介護に関するなんでも相談窓口を設置し、いつでも相談可能とした。

(8) 災害発生時の対応策

4 特に独創的だと思う取り組み

①在宅緩和ケアネットワーク徳島の勉強会

地域の在宅ケアに関わる専門職(多機関・多職種)からなる有志の任意団体を対象とした勉強会を月1回行っている。

- ◆以前より行っている勉強会で、在宅テキストの読合せ学習、各種フォーラムなどの打ち合わせを実施しているが、拠点事業が開始しメーリングリスト等での呼びかけで更にメンバーが増えてきている。多機関・多職種での交流の場の必要性を感じている。

②訪問歯科衛生士派遣事業

10月29日～歯科衛生士が患者宅を訪問。患者様の口腔内を観察し、本人・家族の意向に沿って、徳島県歯科医師会在宅歯科医療連携室を通じて、歯科医へ結びつける事業。

各事業所へ案内文章を送付し、ケアマネ等か

ら問合わせも有。

……訪問実績:80件

- ◆在宅訪問の経験豊富な管理訪問歯科衛生士を雇用し、当院が訪問診療を行っている患者様宅へ歯科衛生士を派遣する事業を開始した。徳島市内の各事業所にも案内文を送付して、依頼のあった患者様宅を訪問。当事業費を活用し利用者の費用負担なしで口腔内観察目的での訪問とし、本人・家族の意向に沿って歯科医への紹介を行った。利用いただいた方には喜んで頂いた。

③在宅医療・介護に従事する人材育成の一環として、実習生・研修医の受け入れ

- ・訪問看護・訪問診療に同行することにより、在宅医療・看護の現場を知り、これからの看護に生かすことができるようになることを目的に、2か所の学校から2か月ずつ、看護学生の実習を受け入れた。 合計12名
- ・拠点病院の研修医が訪問診療に同行することにより、在宅医療の現場を知り、今後の病院での診療(在宅復帰)に生かすことを目的に、2か月にわたり、合計4名受け入れた。

④各機関との懇談会

徳島県、徳島市、徳島県議会議員、拠点病院などに対し、「在宅医療連携拠点事業について」講演し、在宅医療・介護の理解・協力を呼びかけていった。

- ◆当初徳島市は、国の方から通達がないということで、拠点事業の主旨を説明してもそれは県の分野と取り合ってもらえなかったが、働きかけを重ねることで連携会議への参加もしていただけるようになった。

◆徳島県議会議員には、徳島県の在宅医療の現状と課題として講演したが、熱心に聞いて下さり、沢山の質問も頂いた。

- ◆拠点病院で在宅医療連携拠点事業について講演し、退院支援・症例検討会を共催できないか相談した。

⑤がん患者サロン開催(毎月、第3木曜日)

いつでも来所できるような“まちかどがん患者サロン”のような場の提供。かかりつけ医の枠を超え、地域の住民が健康相談、医療・介護に関する相談、がん相談などができるようなサロン機能。今後、カフェ機能を備えネイル・メイクの講習会(化学療法での副作用の対処)なども検討中。

⑥“在宅ホスピスケア”市民フォーラム

東京都“医療法人社団パリアン”
川越厚医師「医の原点に立ち返る在宅ホスピスケア」
川越博美看護師「最期のときを家で～地域で支える在宅ホスピスケア～」
と題した記念講演会、シンポジウムを開催。

5 地域の在宅医療・介護連携に最も効果があった取り組み

◎“ハートホーム”での相談所を開設

本人・家族・事業者、誰でもが、在宅医療・在宅介護のなんでも相談が可能。・・・30名が利用

◆4名のスタッフにより常時、電話・来所相談に応えられるようにしていた。電話の後、来所されて相談を受けることが多かった。また、在宅まで訪問して相談を受けるケースもいくつかあった。ケアマネからの相談、利用者の家族からの相談、癌末期のご本人からの相談、介護事業所、経営者などからの相談もあり。開設以来30件の相談があったが、ハートホームに相談の窓口があることを知って頂いたことで、今後の利用増が期待できる。

6 苦労した点、うまくいかなかった点

◎資源マップ作成について

徳島市内の3か所の拠点事業所のうち2か所協同で行った。もう1か所の事業所にも共同作業を呼びかけたが拒否された。同じものを作るのだから、協同の方がよりよいものが出ると考えたが理解されなかった。

◎もう一つの拠点事業所である徳島市医師会が運営している地域包括支援センターへのアウトリーチを拒否されこと。

7 これから在宅医療・介護連携に取り組む拠点に対するアドバイス

患者が在宅での療養を継続していくためには、介護力の担保がなくてはならない。しかるに介護スタッフのほとんどが医療者側との間に目に見えないバリエーションがあると感じている。

このバリエーションを取り除くには医療者側から介護スタッフに手をさしのべることが大切なことがよく分かった。ただ顔の見える関係ではなく、理念を共有したチームになることが必要である。そのために介護側にアンケートを実施し、興味を抱くテーマを有する多くの勉強会を催したが、とても効果的であったと実感している。

たとえばSTによる食べさせ方実践講座では、こうすれば誤嚥も少なく出来るんだといったすぐに役立つ知識をヘルパーさんたちが身につけられ、今後の仕事での大きなモチベーションとなったと考えている。

8 最後に

多くの国民が終末期においても自宅での療養を望んでおり、希望すればご自宅で最期を迎えることもできる体制の整備が求められている。12年もするといわゆる2025年問題が現実のものとなる。迫り来る多死時代に備えて、今から在宅医療・介護の体制を整備することが必要である。

今年度、在宅医療連携拠点事業所として、数多くの事業(医療介護の連携会議・各種研修会・住民への普及啓発活動等)に夜間・休日返上で取り組み、また地域における在宅医療・介護のなんでも相談所も設置できた。今後も地域医療再生計画のなかで地域の現状や課題に取り組み、在宅医療・介護の提供体制づくりに貢献したいと思っている。